

平成 22 年 6 月 18 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008 年度～2009 年度

課題番号：20720088

研究課題名 (和文) ロバート・ヘリックの理想郷と動乱のイギリス社会

研究課題名 (英文) Robert Herrick's *Hesperides* and Social Turmoil in Seventeenth-Century England

研究代表者

古河 美喜子 (FURUKAWA MIKIKO)

秋田工業高等専門学校・人文科学系・講師

研究者番号：80462125

研究成果の概要：本研究では、王党派詩人ロバート・ヘリック (Robert Herrick, 1591-1674) において、これまでこの作家の抒情的側面にのみ向けられがちであった評価に対し、リーア・マーカス (Leah S. Marcus) やマージョリー・スワン (Marjorie Swann) らの先行研究を踏まえ、また当時の状況を念頭に置いた上で、詩集『ヘスペリディーズ』(*Hesperides*, 1648) における王党派の政治的プロパガンダとしての機能について考察した。成果として、研究論文二本を纏め、著書 (共著) として公表した。

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：17世紀、イギリス、詩、王党派、ロバート・ヘリック

1. 研究開始当初の背景

従来、十七世紀イギリス詩の研究といえば、形而上詩やミルトン研究に主眼が置かれることが多く王党派詩人を取り上げることはまず少なかった。というのも、この時期に活躍した詩人の三つのグループ、つまり①形而上詩人たち(Metaphysical Poets)②ピューリタン詩人たち(Puritan Poets)③王党派詩人たち(Cavalier Poets)を比較してみた時、前時代のルネサンス精神の受容の仕方という点において前者二つのグループとロバート・ヘリックが属する王党派詩人たちは明らかに一線を画

しているためである。即ち、時代精神を肯定的に受け止めることで作品全体に醸し出される「中庸」の精神が時に作品の意図をわかりにくいものとし、またレトリックの面白さや政治詩のインパクトと並べてみた時に第3のグループが一見弱い印象を与えるためである。

とはいえ、ヘリックのような王党派の詩人たちが研究対象として輝きを失わずにいるのも、王党派特有のこうした「中庸」が、見方を変えれば、当時の政治的言論統制としての検閲を回避するための婉曲表現としても同時にうまく機能できた故であろう。

こうした中、最近のヘリック論、先行研究においては、これまでヘリックの抒情的側面にのみ向けられてきた評価に対し、解釈や視座の拡大化がみられる。とりわけ、政治的文脈の中では、リーア・マーカスが、十七世紀の娯楽・習俗がともすれば政治的な問題に発展することを、『娯楽の書』(*The Book of Sports*)という当時の王たちが出した布告などを援用し、同時代のベン・ジョンソン(Ben Jonson)や、ヘリック、アンドルー・マーヴェル(Andrew Marvell)の作品の中で論じ、ヘリック作品の政治的側面を浮き彫りにし、大きな研究成果をおさめている。

続く、マージョリー・スワンは、コレクターとカタログ製作者という二つの役割を担ったとして、アイデンティティの観点からヘリック作品を分析しており、ヘリックの詩作態度を美学の問題として取り上げながらも、政治的読解を意識した論を展開している。

2. 研究の目的

そこで本研究では上記のヘリック研究の現況を踏まえ、ヘリックの伝記やその時代に目を配りながら、王党派詩人であり国教会の司祭でありロイヤリストであったヘリックの描いた理想郷的世界が、ピューリタン社会とはいかに対極的な世界になっているかについて論じ、そこに込められたピューリタニズム批判のメッセージに着目した。『ヘスペリディーズ』が、水面下で王党派の政治的プロパガンダとしてどのような形で機能し得るかについて考察することを目的とした。

勿論この研究においては、リーア・マーカスの研究が重要な先行研究になっている。しかし、本研究ではさらに、マーカスが分析していないヘリックの博物学的興味の中にも、ピューリタン社会や動乱の時代に対する当惑を見出そうと試みた。すなわち田園の自然や民間信仰・伝説、風俗等が、ピューリタン批判の道具として使われていたことを示す。加えて、田園を描くことによってピューリタン批判を実現することが、ヘリックにとって、反抗の一手段であったと同時に、精神の安定を得る重要な手段でもあったことを明らかにしたいと考えた。生来の享楽主義的な傾斜・資質からすると、ヘリックにとっては、田舎での田園生活を楽しむことと、ピューリタンたちを批判することが、自然な形で繋がってゆくからである。

つまり、抒情性や美しさばかりが取り上げられ同時代のダンの形而上詩に比べるとスパイスが効いていない柔らかな印象や平易さというオブラートには実は政治性や諷刺といった辛辣なものが隠されているのだ。これは言論統制下に詩集を世に送りだすための詩人の一つの策であったと考えられる。彼

の詩は一見単純そうで実は複雑な意図を持っていた。そこがヘリック詩の大きな魅力の一つである。本研究では、最終的にそうした詩人の新しい魅力に光を当てることを大きな目的とした。

3. 研究の方法

本研究の柱として、第一に「田園生活に隠された政治性」、第二に「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」という二つの大きな柱を掲げた。平成20年度には、第一の「田園生活に隠された政治性」に関し以下のような題材について取り上げ考察した。続く平成21年度には、第二の「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」に関して同様に以下に示す題材をもとに考えた。

(1)平成20年度：第一の柱「田園生活に隠された政治性」

まずはじめに注視したい点は、ヘリックの詩集『ヘスペリディーズ』中の詩が17世紀英国のピューリタンたちの価値基準や傾向に対し微妙な政治的攻撃の手段として用いられていたというリーア・マーカスの指摘である。実際『ヘスペリディーズ』が、ピューリタンの「安息日厳守主義」及び伝統的な娯楽の是正論を批難することでピューリタン勢力の増大を抑制しようとするジェイムズ王の『娯楽の書』に沿って書かれひいては王党派側の政治的プロパガンダとしての意味を含んだ詩集であったとするならば、ヘリックの抒情詩も政治的意味合いを全く欠いていたとは言い難い。

マーカスは「17世紀英文学における安息日をめぐる休日の政治性」を探った名著『陽気な笑いの政治学』(*The Politics of Mirth: Jonson, Herrick, Milton, Marvell, and the Defense of Old Holiday Pastimes*)の第五章中でヘリックについて言及している。そこでマーカスは直接触れていないロバート・マーカムソン(Robert W. Malcolmson)著『英国社会の民衆娯楽』(*Popular Recreations in English Society 1700-1850*)等の娯楽史に関する先行研究や当時のパンフレットといった一次資料等を踏まえつつ、この問題を本研究の第一の主要な柱として据えた。

- 題材
- ①17世紀の世相と宗教対立の状況
—アングリカンとピューリタン—
 - ②ヘリックの人生観
—「今日を楽しめ」(“carpe diem”)の思想と「瞑想」(“meditation”)の思想—
 - ③『娯楽の書』(1618; 1633)と伝統的祝祭

—王党派詩人ヘリックのピューリタニズム批判の傾向—

- ④ 王党派と田園趣味(パストラリズム)
—カントリー・ハウス・ポエムに現れるヘリックの楽園—
- ⑤ ヘリックの庭とマーヴェルの庭
—二人の詩人の楽園—

(2)平成 21 年度：第二の柱「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」

この詩人の作品中に散見される民俗風物誌的資料ともなる特性及び彼の精神的性(博物学者的要素)における南方熊楠との比較検証、さらに妖精詩というジャンルに注目した。生前の英国各地で行われていた祝祭の行事や遊びなどの一面が詩集中にうたい込まれている点は、ヘリック詩の魅力の一つであると同時に民俗風物誌的資料ともなるものだと言える。この詩人が好んで取り上げた題材については『ヘスペリディーズ』の巻頭の序詩「その著書の梗概」の全十四行が語っているが「小川、木々の花、鳥、木陰、四月、五月、六月、七月、とその月々の花々、五月柱、収穫車」といった一節はこの詩人の関心が 17 世紀英国の田園風景を歌い上げることにあるということを確認に示すものである。明治の博物学者・南方熊楠の「続南方隨筆」中のヘリックへの言及と思われる箇所などを取り上げその影響関係を探ること、そしてヘリックと南方とを結ぶ博物学者的要素という共通項について考察し 17 世紀英国におけるヘリック作品の博物学者的要素の意義にまで考えを巡らせることで、ヘリック作品とフォークロア文学の関係性について考えることを試みた。1725 年ニューカースル・アポン・タインの万聖教区教会の牧師ヘンリー・ボーンが著した『アンティクイタテス・ヴルガレス—庶民の古代遺物』(*Antiquitates Vulgares; or, the Antiquities of the Common People*)等是一種の初期フォークロア文学ということが出来るかもしれないが、ヘリックは「詩」とい形で既にそれに先駆けてフォークロア文学の先鞭を担っていたのではないかと考えている。

- 題材
- ①ヘリック詩の日本における受容
—明治期の翻訳と評論—
 - ②ヘリックの作品に見られる博物学者的要素
—民間伝承及び南方熊楠との関わりからの一考察—
 - ③珍奇のカタログ
—ヘリックの奇妙な昆虫・動物たち—
 - ④ヘリックの妖精詩

—その細密画的な手法をめぐって—

4. 研究成果

(1) 2008 年度には、本研究を遂行するにあたり研究計画で掲げた「田園生活に隠された政治性」「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」という二つの大きな柱とそれぞれに設定した問題点(テーマ)について、論点の整理を行った。

研究成果として、いわば二つの大きな柱の前提ともなる詩人の宗教観について分析し「王党派詩人としての役割—ロバート・ヘリックのアングリカニズム—」と題した論文(『実像への挑戦—英米文学研究—』所収)に纏めた。

論文の中で、ヘリックのアングリカニズムについて「宗教観としては、結局、ピューリタンとカトリックとに対してアングリカンを守護し、両派の中庸道を求めて聖書と自然智とに関わる穏健な道を歩もうとしたリチャード・フッカーに依っている」とした。但し、ヘリックの真ん中とはただバランスよく極端と極端の間に座している訳ではなく、自らを「生まれながらのローマ人」と呼び古代ローマを理想としていた詩人だけに、人生観としてはホラティウスの影響を受けつつ継承して警句を放つてもいる点を指摘した。中庸を重んじるこの詩人の健全な批判精神による、時に極端に走り過ぎるピューリタンたちへの反抗は、ともすれば、同時にピューリタン社会や動乱の時代に対する当擦りとして政治的な機能も持ち得たと結論づけた。

(2) 2009 年度には、前年度に引き続き、本研究を遂行するにあたり研究計画で掲げた第一の柱「田園生活に隠された政治性」第二の柱「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」という二つの大きな柱の特に第二の柱について、設定した小テーマを軸に、ヘリック詩の政治性について理論的な強化を図った。

その研究成果をもとに、論文「『ノーツ・アンド・クィアリーズ』誌とヘリック—『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性—」(十七世紀英文学会編『十七世紀英文学と科学』所収)を纏めた。

ここでは、二つ目の柱、ヘリックの博物学・民俗学的興味に隠された政治性について、『ノーツ・アンド・クィアリーズ』誌(*Notes and Queries*)とヘリックの関わりについて検討を加えた。1924 年 4 月 12 日の『ノーツ・アンド・クィアリーズ』誌、回答欄にヘリックの名前とヘリックの詩、「妖精の神殿、オーベロンの礼拝堂」とが、その引用とともに言及されている。この詩中にあらわれる「ロブスターの貴婦人」(“Lady of the Lobster”)とは、オクスフォード英語大辞典の定義では「ロブ

スターの胃中にある石炭質の組織で、座っている女性の姿の外形に類似していると空想的に思われたもの」とされているものだが、さらに、ヘリックの文脈では新約聖書のフィリピの信徒への手紙、第三章第十九節にある「神がお腹にいる」ことの暗示であるという指摘が標準版ヘリック詩集の編纂者であるL.C.マーティンによりなされている。ヘリックの作品中では、高貴な婦人の座った形に似ていたロブスターの器官が聖母マリアにみたとられ、マリア信仰について述べた箇所となっていると考えられる。しかしながら、一見、マリア信仰をうたっているかのようにみえて、ロブスターには「身を食ると催淫効果がある」ため妖精王オーベロンの信心には、それこそピューリタンが嫌う不貞のイメージも盛り込まれている。こうした記述が示すように、ヘリックの詩は文学作品というだけではなく民間伝承や当時の風習の記録としても十分読み得るものとなっている。ヘリックの詩に含まれているその民俗学的要素は、『ノーツ・アンド・クィアリーズ』という二十世紀初頭の科学雑誌においても言及されるほど、意義のあるものであった。そして、さらに興味深いことには、厳格なキリスト教徒たち、即ちピューリタンに対する挑発的な表現も含んでいるのである。ヘリックは、自分を取り巻く田園生活や民俗に社会的意味を付与しつつ、それらを個々の詩に変えた。政局不安定な時代であって、王党派詩人という立場から『ヘスペリディーズ』の中に政治的な言説を盛り込んでいたことを指摘した。

(3) 二年間にわたり計画された当該研究を進めるうち、ヘリックの場合、一見相反するように見える「抒情性」と政治的言説を含む「社会性」は言論統制・検閲といった当時の時代背景や「詩」というジャンルが持つ隠喩・婉曲表現といった特殊性から実は分ち難く結びついており、作品の中でそれぞれの価値を損なうことなく併存しているという新たな検討課題が浮かび上がってきた。研究完成年度である2009年度、論文「『ノーツ・アンド・クィアリーズ』誌とヘリック『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性」中でも言及した抒情性と社会性の融合の問題に関しては、本研究の継続的な研究課題「ロバート・ヘリックの田園世界—『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性—」（2010年度科学研究費補助金「若手研究(B)」採択課題）として、美学と政治学という観点からも今後さらに考察を加えてゆく予定である。また、今回二つの柱に設定した様々な題材（テーマ）についても、必要に応じ修正・変更を加えながら、引き続き検証してゆきたいと考えている。

(4) 2009年6月刊行の『実像への挑戦—英米文学研究—』（共著）の合評会が、欧米言語文化学会6月例会として、2010年6月13日、日本大学大学院総合科学研究科校舎に於いて行われた。同書は欧米言語文化学会20周年記念論集である。学会主催の合評会の中で、執筆者として、論じている作家・作品への取り組みや今後の問題点などについて発表を行った。各執筆者による発表の後、合評会の纏めとして、参加者による論集全体を通しての書評がなされ、学会論文集としての在り方や意義など根源的問題についても発展的な議論が交わされた。テーマの統一・論文の体裁・個々の内容の完成度など、乗り越えるべき様々な課題や「研究成果発表の場としての論集」についても、併せて以後意識して研究活動を続けてゆきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計2件）

- ① 古河美喜子、荒川光男、岡村真紀子、滝口晴生、宮本正秀、川田潤、吉田幸子、久野幸子、高橋正平、西川健誠、竹山友子、佐々木和貴、松平圭一、生田省吾、『ノーツ・アンド・クィアリーズ』誌とヘリック—『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性—、十七世紀英文学会編『十七世紀英文学と科学』金星堂、総頁数272頁（共著：192-204頁執筆担当）、2010年
- ② 古河美喜子、出口保夫、井内雄四郎、植月恵一郎、奥井裕、閑田朋子、横山孝一、水野隆之、近藤直樹、堀切大史、高橋愛、内堀奈保子、西山里枝、吉田一穂、中村善雄、松山博樹、木ノ内敏久、「王党派詩人としての役割—ロバート・ヘリックのアングリカニズム—」、欧米言語文化学会編『実像への挑戦—英米文学研究—』音羽書房鶴見書店、総頁数260頁（共著：9-31頁執筆担当）、2009年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古河 美喜子 (FURUKAWA MIKIKO)
秋田工業高等専門学校・人文科学系・
講師
研究者番号：80462125